

# 令和7年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

## 高校生の部 最優秀賞

### 人生と時の在り方

光塩女子学院高等科 2年 楊井 思帆

作品名『夢十夜 第七夜』

選んだ一行 自分は益々つまらなくなった。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切って海の中へ飛び込んだ。ところが――自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。

「自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。」この文は、『夢十夜』の第七夜において主人公が発したものだ。

なぜ主人公は船の甲板から身を投げたことを決意したのだろうか。自分の行く先に対する臆げな不安に苛まれたからだろうか。ふと自分が大きな船に乗っているのに気づいた彼は、船の男に行き先を訊ねるも、男はそれを笑って囁すのみ。いつ陸へ上られるかも分からず悶々とする主人公を横目に、船は構わず黒い煙を噴きながら絶え間なく船路を進んでいく。心細さのあまり、船での無味乾燥な日々から脱却すべく、主人公は入水自殺を図ったのかもしれない。

しかし身を投げた瞬間、「命が惜しくなった」と後悔の念を抱き、それまでの自暴自棄な感情は一転する。これは、命を自らの手で葬り去ろうとしたことへの後悔と同時に、船で実りある日々を過ごさなかったことへの悔悟の念も含んでいると私は感じ取った。主人公は船内で三人の人物に出会う。天文学を究める一人の異人は、星座観察する主人公に北斗七星の話聞かせ、船だけに留まらない星や海の世界を壮大に語った。また、ある女がピアノを奏でる横である男が口を大きく開いて唱歌を歌った、まるで船に乗っているのを忘れていくかのように。このように彼らは学問を究め、趣味嗜好を楽しんでいるが、一方の主人公は「天文学など知る必要がない」と一蹴し、悶々とするばかりで何もしない。そんな彼は死ぬ間際に自らの怠惰を悔いたことだろう。人生という有限の時間の下で、無為の時を過ごし悔いたまま命を終えるのは愚の骨頂である、と漱石に話しかけられている気がして、私は心に火が灯るような、奮い立つ気概を感じた。

主人公が海に飛び込んだ後も、船はそれをものともせずひたすら波を裂き航海を続けていく。これは、森羅万象と時の関係と捉えることはできないだろうか。例えば私たちが何をしようとせずとも、構わず時は進んでいくし、乗客の事情や心情など歯牙にもかけない。主人公がどれほど戻らない時を悔やもうと、海の深淵に沈みゆく運命は変わらないのだ。この事実は、時の残酷性や不可逆性を強調しているのであらうか。時は有限で人に与えられた時は束の間である。だからこそ、私たちは有意に日々を送った方がよい。そんな漱石の言葉が聞こえてきたと同時に、時という両義的で掴み所のないものを巧みに描出した漱石の筆力に感嘆した。

私も、茫洋とした海を駆け抜ける船に乗っていると伝えよう。止まることを知らないその船からいつ降りることができるかは不透明だ。時には嵐の夜に巻き込まれるかもしれない。しかし、私は船内で星を語り、ピアノを奏で、願わくば船長になり船を牽引せんことを祈る。前途洋々な若人は今、途絶えぬ時の流れを開拓せんと邁進していく。